巨魚伝説

小嵐九八郎

書下ろし　長篇冒険小説

NON POCHETTE

◆「ノン・ポシェット」創刊のことば

ノン・ポシェットは、ノン・ブック、ノン・ノベルの姉妹シリーズです。しかし、ポケットなり、ポシェットなりに楽に入る小さな判型、また既成のノン・ブック、ノン・ノベルから生み出されたという事情からいっても、むしろ両シリーズの子どもと申せましょう。

両シリーズの数ある本の中から、豊かな心、深い知恵、大きな楽しみに満ち、年月を経ても色褪せない「現代の古典」となるべきものばかりを厳選したつもりです。どうか親版のノン・ブック、ノン・ノベル両シリーズ同様、このノン・ポシェット・シリーズをご愛読いただき、進んでご意見、ご希望を編集部までお寄せくださるよう、お願いいたします。

昭和六〇年八月一日

NON・POCHETTE編集部

●ノン・ポシェット－NPN93

巨魚伝説　長編冒険小説

昭和63年6月1日　初版第1刷発行

著者　小嵐九八郎

発行者　伊賀弘三良

発行所　祥伝社

東京都千代田区神田神保町3-6-5
九段尚学ビル　〒101
☎03（265）2081（営業）
☎03（265）2080（編集）

印刷所　堀内印刷

製本所　ナショナル製本

万一、落丁・乱丁がありました場合は、お取りかえします。　Printed in Japan.

ISBN4-396-32093-0 C0193

©1988,Kuhachirō Koarashi

書下ろし

長編冒険小説

巨魚伝説

小嵐九八郎

祥伝社 ノン・ポシェット

目　次

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertong

序章 7
一章 怪魚 13
二章 女教師 39
三章 漂流 73
四章 生還 125
五章 幻魚 150

六章　巨魚伝説　175
七章　祖父の屍（かばね）　197
八章　挑戦　234
九章　迷い　276
十章　死闘　295
終章　311
あとがき　313

本文イラスト・黒沼和春

序章

暗褐色にごつごつした頂が、空を斜めに切っている。

山岳全体は獅子が大地に寝そべるがごとくだ。

東片方はなだらかに日本列島中央部に落ち、西片方は、稲倉岳、笙ヶ岳、観音森を従え日本海に手を伸ばしている。

鳥海山。

海抜二二三七メートル。

日本最古の火山活動の記録を持ち、度重なる火山の爆発は山麓に住む人々に畏怖を与え続けてきた。

その爆発の痕跡は、外輪山ばかりでなく、湿原、そして川が塞き止められてできた無数の湖沼

に示されている。

——北峰太郎彦は、来年十五歳。

——太郎彦に、父はいない。母の胎内から生まれ出た時には死んでいた、ということだ。

——太郎彦は、ちち、と聞くと胸底を圧迫される。どうして、ちちは、乳房の乳でなく、したがって母性を表現せず、父親の父なんだろうか。

——父の命日は、八月十日。

——だが、太郎彦は父の職業も、父の明確な死因も知らない。死に場所を除いては。

——誰もが、右片腕が肩口からない七十一の祖父も、狭い田畑を耕す念仏好きの祖母も、そして村の人間全部が、父のことになると口を閉ざす。ある者は、青い顔をしていきなり。ある者は、話題を逸らし。ある者は、ニヤリと笑いながら。

——唯一、太郎彦を産んで父の息遣いを知ってるはずの母は、去年、太郎彦が中学に進学するや出奔してしまった。

〝逃げた〟母親に太郎彦はなんの未練もない。あるのは、うっすらした蔑みだけだ。

——父の縁を思い出せるただ一つのものは、仏壇の奥に眠る黒枠の写真だ。ピントがブレているその写真は、ブレているにもかかわらず、目つきが飢えて窪んでいて、削げた左頬に傷の縫い

目がしっかり残っている。八センチほどの傷だが、今にも生き返って話しかけてくるように生々しい。左肩を上げているのも気になる。

――父の旧姓は団。名は、孝太郎。これからすると、父は北峰の家に婿に入ったことだけは、はっきり分かる。

――そうだ。もう一つ、父について太郎彦が薄々感づいてることがある。

それは、父親について太郎彦が出奔直前の母親にしつこく尋ねたら、「あの、あほんだら、かいしょなし、やくたいもない」と、空を睨んで答えたことが一度だけあったのだ。

純粋山形育ちの母が、関西の言葉を使ったのはたった一度のことだった。

――以来、太郎彦は関西の言葉を聞くと、胸底がときめく。

――が、この山麓の地で、西の訛を聞けることは、めったにない。

太郎彦は、晩秋から春までの間は吹きつける雪に隠され、めったに拝めない鳥海山の南の斜面の麓に、抱かれるようにポツンと住んでいる。

太郎彦の一軒家から、万屋のある部落の中心部まで二キロ、さらに、分校のある村はずれまでは五キロある。

鞣革の鞭のようにバネの詰まっている太郎彦の足は、この道の行き帰りによって鍛えられた

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertong

ところが大だ。雪深い冬も駆け走って登校する。月光川の澄んだ流れの音をかき乱し、靴を轟かせ。

月光川は、鳥海山の中腹、みどり湖から奔流を運んでくる。

みどり湖は――父の死んだ場所といわれる赤元池から、おおよそ一〇キロ離れたところにある。鳥海山の山腹を、時計廻りに四分の一周、九十度行ったところだ。

太郎彦の家からみどり湖までは五キロ、町の人の足で三時間、地元の人の足で二時間、太郎彦の足で一時間半、月光川を遡らねばならない。

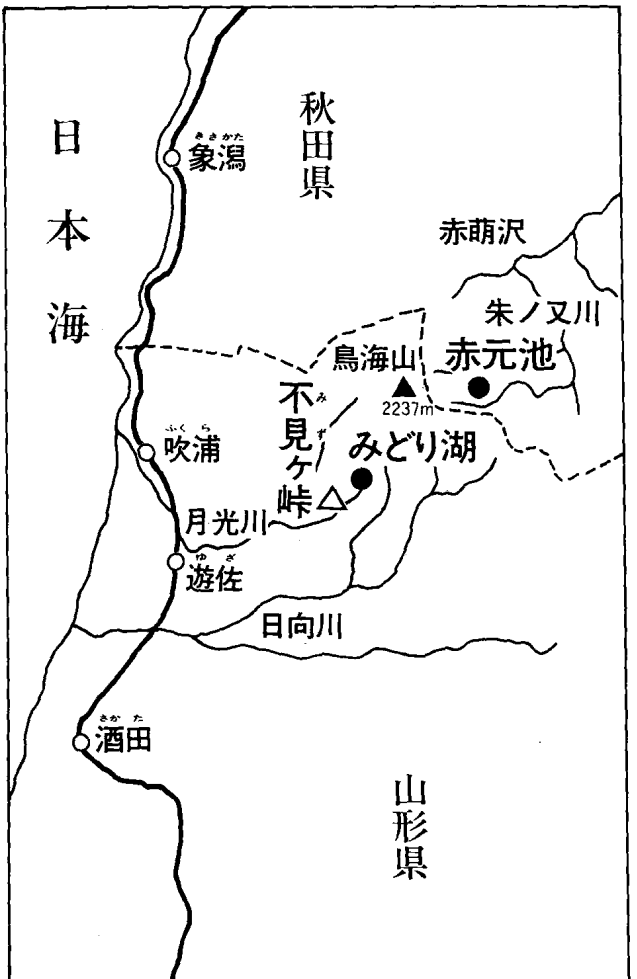
みどり湖は、鳩の胸毛の青灰色をしている。

みどり湖は、江戸時代後期、一八〇一年に聖なる鳥海山の爆発によって川が塞き止められできた湖で、四囲を山で囲まれている。

みどり湖の最大水深は、一五〇メートルとも、五〇メートルともいわれるが不明だ。

みどり湖の周囲は約二キロメートルで、ブナ林の源流を集め、その水を月光川へ注いでいる。みどり湖の標高は九〇〇メートルだが、源流がわずかにでも流れ込むゆえか厳寒期でも結氷しない。

結氷しないといえば、太郎彦も父の死に場所の標高九〇〇メートルの赤元池を一年に一度は訪ねるが、その赤元池も然りだ。


日本海
象潟
秋田県
赤萌沢
朱ノ又川
鳥海山
赤元池
2237m
不見ケ峠
みどり湖
吹浦
月光川
遊佐
日向川
酒田
山形県

一方のみどり湖はやや青みが濃くて透明度が深く、他方の赤元池は銀色と鉛色の中間に近くて濁りというか、粘っこさがある池だが、両方とも静かさを湛えているのに結氷しない。

とりわけ赤元池は、流れ込む川もないのに結氷しない。

みどり湖には、人々はめったに近寄らない。春と初夏が一時にやってくる山菜摘みの季節を除いては。

みどり湖に接近するには、通称不見ケ峠に登って七十五度の急斜面を下りるか、月光川の渓谷を攀じ登るしかない。

結氷もしないみどり湖に魚が棲むとすれば、冬眠もなく、すくすく育つだろうことが想像される。

が、地元の人間は五月のほんのある時期にしかみどり湖に近寄らない。それも、村人が大勢で月光川の渓谷を攀じ登り、周りが急峻な湖のあちら岸に小舟で渡り、ぜんまい、わらび、たらの芽を採るためだけに。湖のあちら側の月光川沿いは、五月の一時期だけ山菜の宝庫となる。

――しかし、みどり湖にめったに寄りつかない理由は他にもあるらしい。

一章　怪魚

あっさりと黄色いニッコーキスゲが、鳥海山の山腹に咲き群がっている。山百合や鬼百合のように大袈裟に花びらが捲れておらず楚々として、波打つごときだ。

八月十日。

父の命日だ。

太郎彦は暗いうちから目を覚ました。

手探りでナップザックを探す。

「……彦、どこさいぐ?」

祖父が襖ごしに訊く。

「おうちゅう、赤元池に決まってるびょん。父っちゃの命日だ」

「命日？　あっ、んだな」
「ついでに、鯉釣りをしてくんべし。へら鮒用の竿を試してあげんべか？　爺っちゃ」
「要らね……気いつけていがねばやずかねど……まさか……みどり湖でねえべしゃな？」
「みどり湖、みどり湖ってうるしえな……なんか、あるだか？　爺っちゃ」
「いや、いや、なんもねえ……線香は持ったか？」
「そんだらもん……花っこが、どこにでもあらあから、線香代わりにするだ。酒っこも持ったし」
「んだか」
太郎彦は草刈りでくたくたの祖母を起こさぬよう、素早く外へ出る。竿を担いで。
たかだか六〇センチの鯉に、祖父の手作りの竹の和竿など不要だ。四・二メートルのグラスロッドの投げ竿で充分。それに今日は、あくまで父親のあるかなしかの匂いを墓標に嗅ぐのが目的だ。
ただ……鯉用のぐちゃっとした練り餌は前の日から準備している。さつま芋と山羊の乳をどろどろに溶かしたやつだ。太郎彦の幼い頃からの釣り史の中で発見したものだ。
鯉用の練り餌は、真綿にたっぷり吸わせている。
歯のない鯉は、口許の髭で真綿に滲み込んだ特製の練り餌を幾度か味わい、安心したところで

じわじわと異物感のない真綿を吸い込む。やがて一挙に飲み込んだところで鉤がかりして、一丁上がりのはずだ。

夏バテ気味の婆っちゃに、野鯉の鯉こくでも作ってあげんべい。

太郎彦は、星の残る空を見上げた。

鳥海山が藍色の空に、ひときわ黒く聳え、この懐から人間は外へ飛び出られないような大きさに映る。

赤元池までは直線距離にして一〇キロだが、それはあくまで鳥海山の山腹を真っすぐ横切れたらの話だ。峠を越え、日向川に出て、日向川の支流沿いに下り、また上りと、鳥海山の裾野をジグザグに迂回して、歩かねばならない。

したがって、太郎彦の足で片道五時間はかかる。

赤元池は、赤萌沢とか朱ノ又川とか赤沢川とか、めったやたらに赤と関係する三つの川の最上流の方角にある。

父っちゃも、へんなところで死んだもんだ、とつくづく太郎彦は思う。

ま、ついでに鯉釣りもできんだから、いいだべい。もっとも、赤元池で釣るのは初めてだが。

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertong